

右下腿骨を骨折して

野村 博
(佛敎大学社会学部敎授)

1

ちようど今日九月二十日で、まるまる六か月になる。医師によれば、六か月経てば正常に近い歩行ができるようになるということであつたが、實際そのとおりになつた。

それは三月二十日(日)のことであつた。

老化の兆しは脚力の衰弱から始まるということを、嫌というほど身近な人びとの間で見聞きしてきただけに、五十の手習いで乗り始めたマイカーの常時運転による運動不足の懸念も手伝つて、少なくとも月に一度ぐらひは山を歩くことにより、いささか自信のあつた健脚を維持しようと考え、同好の先輩Y先生と、ここ数年来、山の散策をエンジョイしてきた。

この日も、三月五日(土)の湖南アルプス田上山系笹間が岳登山に次いで、待ち遠しかった春先になつてからの二番目の山登りであつた。京都駅からバスで洛北大原まで行き、翠黛山——金毘羅山——江文峠——静原——鞍馬——貴船と歩いて、貴船口から京福電車に乗り、出町柳へ出る心算であつた。金毘羅山で正午になつたが、予定したコースと時間を考え、江文峠に降りる少し前の見晴らしのよい所で昼食をとつた。山での日の丸弁当のおいしさ、一汗かいた後での缶ビールの美味さ、これはまた格別である。約四十分そこそこ腰を下ろして、再び歩き始めた。林道を目前にした小岩だらけの傾斜三十五〜四十度の急な下り坂に二〜三步足を踏み出し、先行のY先生に「氣をつけないと危ないですよ」と口に出そう

とした途端、自分のほうが地面に露出していた小岩に右足の土踏まずで蹴躓く。「あっ痛っ！」と思わず叫び声が不覚にも出ると同時に、「しまった！」という思い、一瞬あたりが暗闇になるとともに冷汗が頭の天辺から額にかけてきつと流れ出る。失神は一秒か二秒の束の間。痺れ切ったように動かせば飛び上がるような痛さが、右下腿に走る。急坂と左側の絶壁から転げ落ちては、という本能的にも思える反射行動で、蹴躓いたその場へ、うずくまる格好で倒れたようである。右の足首から膝の間に異状が感じられる以外、身体の中の部分にも別に怪我はなさそうである。地面に叩き付けた左手の掌をはじめ、首から前にぶら下げていたカメラ、左肩から腋の下に挟んでいた双眼鏡も、かすり傷ひとつ見当たらない。リュックサックも背中に負うたままである。「どうしたっ？」とY先生が案じて足に触る手が、右下腿に激痛を与える。「しばらく、ほっておいて」と言ったものの、数分経っても身動きもできない。

折りから来合わせた二十数名の家族グループ、急坂に婦女子が黄色い声をあげていたが、そのリーダー格の年輩の紳士が横たわっている私の傍へ来て、顔を見ながら「骨折なら冷

汗に震えがあるから、きつと足首の捻挫ぐらいですよ」と言ってくれる。静原方面へ行くというこの人に、電話を見つけたら一九番するようにお願いした。と、そこへ今度は、急坂を登ってくる五名のグループがあった。三十代前後の登山家たちで、事情を知ると、ベテランらしく直ちに私の右下腿に棒切れで副え木をし、自分たちのハンカチで堅くゆわえつけてくれた。救急車が来ても、林道まで降りているほうがよからうと言って、私の左右の手足を四人でそれぞれ一本ずつ、あとの一人はベルトの背中部分を握って、険しい坂道を難渋しながら、やつのことで運び降ろしてくれた。登山者のほとんどいない所で、このように二組の人びとに出会い、電話連絡は頼めるし、林道まで降ろしてはもらえるし、まったくラッキーというほかはなかった。

ピーポー、ピーポーの音とともに救急車が、やって来てくれた。日に二度や三度、この音を耳にしない日がない昨今ではあるが、まさか自分がそのお世話になるとは思ってもみなかった。災難や事故は、いつ・どこで起こるとも限らない。

予期できないからこそ、災難・事故なのだが。かなり激しく揺れる車中で、住所・氏名・年齢・職業などを訊ねながら、

絶えず「大丈夫ですか、痛みますか」と気を配ってくれる消防署員の暖かい言葉に胸を熱くしつつ、打撲した脚部以外はどこにも痛みや傷のないことを自分で確認して、不祥事の中せめてもの幸いであつたという思いが、頭をよぎった。

しかし、救急車で運び込まれた岩倉の病院で早々に撮られたレントゲン写真は、足首の捻挫ではなく右下腿骨（足首より約十センチほど上の）骨折を映し出していた。応急処置として巻かれたギプスの暖かさが至極快適で、ベッドに横たわった疲れた身体に心地を与えてくれた。翌二十一日は春分の日であつたが、主治医の計らいで、午後手術を受ける。腰椎麻酔のために下半身は無感覚、二時間を越えた手術中も大して痛みを感じなかったが、夜になり麻酔が切れるにつれて、手術された局所よりもむしろ腰骨の辺りが「いただるく」て、熟睡できない一夜を過ごした。手術を受けた局所は、その後特に痛みを感じたことがないのは、不思議といえば不思議である。だが、現に「加療静養三か月」の診断。松葉杖の生活が始まった。

縫合の糸を四月二日と四日の二回に分けて抜いてもらい、ギプスを巻いて六日に退院。十八日間にわたる入院も、ほと

んど毎日、合わせて五十数名の方がたの間断のないお見舞いを受けて、退屈する暇もないうちに時間が経ってしまつていた。お見舞いくださった人びとのなかには、職務に忙殺されどおしの私のことを知ってか、「天の配剤、折角の機会だからゆっくり休養するように」と慰め励ましてくれる人も多くあつた。自宅静養中もお見舞いくださる来客や電話の応待で、瞬く間に一週間が過ぎ、十三日に病院を訪れる。入浴時に右下腿部も洗えるようにと、ギプスの脛の部分を切断して自由に着脱できるようにし、局所をこしこしと洗うほうがよいとのこと。しかし、傷口が生々しいうえに、折れた骨にステンレスが副えてある以上、なかなか強くこする気になれないのが実状である。二十八日、レントゲンの映像は取り立てて変化がなし。異様なまでに、ステンレスの副木がくつきりと見える。五月十一日、手術後五十一日目にしてギプスはすっかり取り除かれ、ホッとすると同時に、不安の念に駆り立てられる。除去したいギプスにいかに依存していたかが、如実に痛感させられたのである。

「三か月静養」の診断とはいえ、新学年度早々それほど長く休むこともできない。五月十六日の月曜日から出講するこ

とにしたが、如何せん、松葉杖がなくては一步も歩めない不自由なわが足。娘の運転する車で大学へ通う。七月の声を聞いて、やっと松葉杖からステッキ二本に、そして、自分の足でマイカーも運転できるようになった。いざという時にブレーキが上手に踏めるだろうか、こわごわながらも、しかも自分で運転ができた時の喜びは、えも言われぬほど大きかった。七月も中旬になった頃、ステッキも一本で歩行できるようになる。大学も夏期休暇に入っていたが、それから後は、乳幼児の一日一日の目覚ましい成長にも似て、日が経ち時が進むにつれて、ありがたいことに回復も顕著になってきた。そして、六か月経った今日この頃である。

2

五十一日間にわたった右下腿のギプス着用と三か月におよぶ松葉杖の使用は、当然のことながら、右足をいよいよ大事にするという気配りも加わって、著しい運動不足をきたし、そのために足首をはじめ膝や大腿骨を軟弱にし、筋肉をも萎縮させたのだろう。折れた骨がどうにか接合した今日でさえ、まだ完全に正常で自然な歩行はできない状態にある。一時期

からすれば、随分と楽にはなったものの、やはり不自由であることに依然として変わりはない。歩く時はもちろん、坐っていて身動きする場合でも、いや睡眠中でさえも、絶えず右足を意識しているのである。おそらく完全に自由になった時点には、意識しなくなることだろう。健康とか幸福とか自由とかいうことは、意識しないものかも知れない。

右下腿骨々折という障害をもつ不自由な身体になって、いかに社会生活一般が健常者中心に営まれているかということに、今さらながら、つぶさに気づかされた。わが家の屋内・外の構造はもとより、多くの公共機関の建物や施設・設備など、驚くほど障害者にとって不親切で、障害者のことなど念頭に全然ないかのようである。いつ障害者になるかも知れない健常者こそ、社会生活における障害者の問題に、もっと思いをいたすことが焦眉の急務であると痛感させられたのである。社会生活は何も健常者ばかりのものではない。むしろ、障害者と健常者が肩を並べて存在しているのが、普通の正常な社会生活であるといえるだろう。福祉国家スウェーデンにおける社会福祉制度の原理が、いわゆる「ノーマライゼーション」にあるというのも、なるほど至極当然と納得できるの

である。

それにしても、しかし、障害者は——先天的にしる後天的にしる——不自由である。自由とは障害の欠如であり、理想主義的国家論によれば、障害の除去こそ国家の任務である、という。本意ならずに先天的な心身の障害をもつ人びとに対しては、たとえその障害そのものを現代の医療技術をもってしても抜本的に除去することができない場合でさえ、障害をもったままで人間としての諸能力が実現できるように社会的な障害を除去し、一回限りの人生を個性的に生きることができるよう社会的な諸条件を整備することこそ、国家にとって必要不可欠の喫緊事であろう。経済の高度成長政策の必然的な歪みに喘ぎながら、国家存亡を第一義と称して専守防衛などと糊塗し、福祉政策を後退させて軍事強化を企図する国家では、障害者にとって救いはないのである。

一方、不自由な障害者が障害——機能的な障害——の事実を受容するということも、障害を克服して、個性的な人生を生きるために是非とも欠くことができない重要事であろう。総じて自己受容は、自由の必要条件だからである。そこから障害者の自立的な生活が始まるのである。これに対して果た

して健常者はすべて自由であるといえるのだろうか。機能的な障害がないという点では、確かに不自由ではないが、だからといって、自由な人生を生きていると豪語できる人が、それほど大勢いるだろうか。

世の中には、障害があっても自由な人もいれば、障害がなくとも不自由な人もいる。自由な障害者と不自由な健常者、などといえば、アイロニーと思われるかも知れないが、これは真正正銘のパラドックスである。機能障害は人を不自由にするが、しかし、社会的条件さえ整備されれば、障害者も自己実現の道を歩むことができる。逆に、障害のない健常者でも、諸能力を発揮しようとしていない不自由な人びとも現実には多いのである。もともと自由には、障害の欠如という消極的な意味あいと、諸能力の実現という積極的な意味あいがある。したがって、消極的な意味での自由がない障害者が積極的な意味での自由を享有し、消極的な意味での自由な健常者が積極的な意味での自由を享有しないということは、当然ありうることであるし、現にあると思われるのである。

下腿骨を折った私の場合には、幸いにも健常な状態に回復するという見込みがある。機能の障害も、時間の経過とともに

に治癒するという希望がある。だから、不自由な障害がなくなつた暁には、あれもしたいし、これもできる、と見果てぬ夢になるかも知れない願望をいろいろと胸中に描くことが可能である。しかし、機能障害が回復した時、果たしてどれだけこれらの願望を実現するように努めるであらうか。心もとないものを感じて、内心忸怩たるものがある。つまり、健常者になつても、積極的な意味あいの自由をどこまで行使できるだらうか、という懸念である。

こんな贅沢な懸念とは別に、回復の見込みがない障害者の場合、障害をもつたままで諸能力の実現をはかろうとする欲求の念がいかに強烈であるかは、障害者と親しく接した人ならば誰でもみな知っている。不自由な障害者が障害をもつたままで、その諸能力を実現できるような社会こそ、ノーマルな社会であると言わなければならない。このことは、ただ障害者に援助や介抱を与えるということではなく、障害者が自立し独立して自分を実現しつつ生きられるように社会的な諸条件を整備することが重要であるということを意味するのである。

「自由は空気みたいなもの。今は空気がふんだんにあるか

ら、空気のことなど考えないどころか、感じさえもしない。自由も、それと同じである。」と、いとも明快に述べた学生がいる。私自身も、不徳のいたす所、予期せぬ事故で障害を受け、不自由な身体にならなかつたなら、身につまされる思いで障害者の自由について深く考えることが、できなかったかも知れない。他者に対する配慮や思いやりは、一般に想像力にもとづく所が大きいが、他者と同じような体験が付け加われば、配慮や思いやりも一段と深いものになること必定である。飽食の世代が飢餓の世代を理解することは、体験がないだけに、すこぶる困難であるのと軌を一にするであらう。それはさておき、健常と障害は紙一重、いや表裏一体である。健常者と障害者がともに自由でありえてこそ、健全で正常な社会といえるのである。大方の人が先刻で承知のこんなことを、痴愚な私は自分自身が足の骨を折り、ギプスを巻いて松葉杖で歩く身になって初めて感得するにいたつた今日の頃である。ご迷惑をおかけした人びとや、お世話をいただいた人びとにお詫びとお礼を申しあげるとともに、どうやら下腿骨を折つたことにも感謝しなければならぬ。

——一九八三・九・二九脱稿——